

## ソシユールとケイパビリティ

### 1. 物、財と人間の幸せ

伝統的な経済学では財（物）と人間の幸せの間を介在するものは、効用、厚生である。厚生とは財（物）などから得られる心理的な幸せ感だが、この厚生を最大化する事を唯一の目的として合理的に行動するのが、理想的な経済人(ホモエコノミカス)とされる。

この理想的経済人(ホモエコノミカス)達、ホモエコノミカスの行動を正しい選択行動として、その行動予測から経済政策等の効用を推定し、事の善し悪しを測るのが基本的には厚生経済学的な枠組みである。ここでは人間存在は、自己利益最大化、効用最大化を求めて財と幸せの間に介在している、極めて単純かつ類型的な相貌をしていると言えよう。

これに対して財（物）と幸せの間に介在するものを効用に代えてケイパビリティとするアマルティア・センの枠組みでは、人間が将来の自分の生活をどれだけ豊かにできるのかをケイパビリティ（潜在能力）としているので、人間は自分の望む豊かさを求めて、目の前の財（社会制度を含む）をどのように活用しようかと様々に思惟し、行動する存在である。人間は思惟し、社会関係の中で自律的に行動する多様な相貌を持つ者とされている。

人間はその境遇（心身の障碍、病弱、貧富、出自など）からのさまざま制約をうけながらも、財を活用しようと思惟し、社会関係を生きて、豊かさを手に入れようとするのであれば、物と「人の幸せ」を繋いで幸せを決するものは、人間が財を目の前にして思惟し、社会的な行動に及ぶ力、ケイパビリティ（潜在能力）である。人間とは多様な境遇の中で、思惟し社会的に行動して変化、成長する存在、多様な価値と境遇を生きる者達となろう。

### 2. ソシユールに関連して

ところでソシユールは 19 世紀後半から 20 世紀初頭を生きた言語学者だが、現代思想、構造主義の展開に大きな影響を与えたといわれている。有名な「言葉とは差異のシステム」だとして、物質界と人間の観念世界の関係についての固定観念をひっくり返したと思われる。山あり、川あり、自然あり、そのあり様そのままをなぞって言葉が生まれたのかと思いきや、その逆であるという。物的世界のありようは、人間の差異化する力、区別する能力、観念作用、考える力によってその形を表す。

たとえば虹の七色は、世界中の民族が一様に七色とはしない。みどり一つをとっても、豊かな自然に恵まれた日本では、萌黄色、若草色、利休鼠もみどりの一種。その文化で、人々の識別可能な限り、差異化する限り、音の組合せの違いとなって言葉は生まれる。

人間の差異化する力、違いを識別して区別してゆく力、概念化する力こそ、人間と他の生物とを分ける、ホモサピエンスの本質。極北の地までその生息圏を広げ、文明を築いて繁栄する人間の本質であろう。

「人間の幸せ」と物との関係も、ソシユールのこの有名なシニフィアン/シニフィエの関係に似ている。言葉では、言葉の物的要素である、音声（人体の声帯や唇）と指し示す意味は、人間の差異化する力（人の観念作用に至る）によって自由に繋がれて、言語として

あらわれる。その観念作用の自由度が言語を、文明を豊かならしめた。

「人間の幸せ」も、物的要素である生活財（物）と「人間の幸せ」（生活の豊かさ）とは、人間の生活財（物）をどう使うかという「思惟する力」に繋がれて、「人間の幸せ」（生活の豊かさ）としてあらわれる。物と「人間の幸せ」（生活の豊かさ）を繋ぐ、人間の思惟する力、加えて社会の中で活動する力、その自由度（ケイパビリティ、潜在能力）が、人を幸せ（豊か）ならしめる。

ケイパビリティ(潜在能力)は、社会の在り方、政治の在り方にも影響を受ける量であり、その多さが豊かさを決する。ケイパビリティ概念とは、人間の幸せ、豊かさを、人間存在の本質（思惟し、社会行動する力）、その自由さに焦点を当てていると言う事が出来るかもしれない。

### 3. 相対的貧困、新しい貧困とケイパビリティ

戦後復興を成し遂げ、豊かな社会となった 1970 年代、タウンゼントは、生物学的な生存を脅かす程の生活財の不足、絶対的貧困に対して、豊かな国の貧困、相対的貧困概念を提示している。この貧困は生物学的な生存は確保されていても、自分の生活水準が社会の平均的な水準と比較して劣っているが故に、人に無力感や、剥奪感をもたらす貧困とされる。

自分の所得ばかりではなく、他者(その社会の平均的所得水準)との比較に於いて問題となる点で、相対的貧困とは格差、不平等を本質とする貧困である事がわかる。そして相対的貧困の概念規定が物語るように、無力感、剥奪感をもたらす貧困、いわば思惟し行動する力、人間の本質を傷める貧困と考えられる。

さらに新しい貧困、社会的排除は、その社会の主要な社会関係、家族、職場、コミュニティの人間関係から次第に排除されて、次第に物質的貧困に至る貧困であり、社会的存在としての人間の本質を奪われているとも言える貧困であろう。

ケイパビリティ概念は、人間の本質、思惟し行動する力を、財や物を評価し(思惟し)、活用する自由度という、経済活動の側面から、物を人間生活の豊かさに転化する力に焦点付けて、数量化可能な概念となしていると思われる。

### 終わりに

ケイパビリティ概念は、思惟し、将来の豊かさを達成する為の行動の幅といった、人間存在の本質的な能力、在り方に焦点を当てて、人の幸せ、豊かさを問題にする概念である。

人間は自分の境遇(障害や病弱、貧富の差など)によるさまざまな社会的制約に向き合っており、それにも拘わらず、豊かさを求めていると言う理解がその人間観である。また財活用のための行動、ライフチャンス、可能性の拡大、平等を問題にする点で、社会福祉の問題意識とは共通である。また現在の状況から未来の豊かさに転化できる可能性という、帰結主義をこえた未来的な量を問題にする概念である。

人間社会の《善》、社会政策の目的は、ケイパビリティの拡大、平等であると言う。